The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	属性の意味論と活動の文脈 ： 椅子が荷物になるとき
Author(s)	仲本, 康一郎
Citation	日本語・日本文化. 2006, 32, p. 39-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8627
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

<研究論文>

属性の意味論と活動の文脈
――椅子が荷物になるとき――

仲本　康一郎

1. はじめに

形容詞は、一般に、対象に備わる事物の性質と考えられてきたが（Croft 1991）、属性の理解に関わる具体的な経験の構造を考慮すると、属性の概念は単なる事物の客観的な性質でなく、人間と環境の相互作用に基づく“相互作用的属性”として理解されるべきことがわかる。本稿は、このような属性の本質を考慮し、主体と対象の相互作用を前提とした形容詞の解釈の枠組みを提供する。その際、意味の理解は場面のなかで成立するとするフレーム意味論を応用し、属性理解に関わる“活動の文脈”を明示的に表現する方法を提案する。

第二節では、認知言語学のいう主体性の議論を批判的に検討し、新たに活動の主体として行為者の観点を取り入れる。第三節では、生態心理学の知覚・行為観を概観し、事物の属性は能動的なアクションのなかでこそ立ち現れることを示す。第四節では、そのような活動の文脈を明示的に表現する手段としてフレーム意味論の方法論を用いる。第五節では、具体的な表現として「かたい」に焦点をあて、比喩や物語の理解にアクションの理解が必要となることを示す。最後に、第六節で本稿のまとめと今後の展望を図る。

2.「見え」から「構え」へ

認知言語学は従来の意味論に対して主体による概念化という観点を導入し、言語に現れた図地の反転や虚構的移動などの新たな言語現象の分析を可能にした。しかし、言語の概念化の背後にある現象をゲシュタルト心理学の知覚モデルによって一般化したことにより反って見えなくなった事実もある。本稿は、生態心

理学の観点を導入し概念化の主体を単なる見えの主体＝観察者でなく、能動的な活動の主体＝行為者とみなす。

2.1. 主体性の言語学

さて、認知言語学の特色を一言で述べるならば、山梨（2000）も指摘するように「主体性の言語学」と称してもいいだろう。これは言語の表わす概念は、外界の直接的な反映でなく主体による外界の知覚や認知の反映であるという立場として次のように纏められる（Langacker 1987/1991、Talmy 2000a/b、山梨 1995/2000、河上 1996、大堀 2002）。

（1） 主体性の言語学

A. 主体性の仮説 ： 発話の背後に認知の主体が存在する

B. 意味＝概念化[1)] ： 言語は概念化の過程またはその産物である

このような観点に立ち、認知言語学は従来の真理条件的意味論で対象外とされていた微妙な言葉の意味の違いを“捉え方（construal）”の相違として分析できるようになった。次の文は客観的には等価な現象であるが、その背景にある事態の捉え方が異なるとされる。具体的には、中身のワインと空っぽのビンのどちらを前景化するかという図と地の問題とされる（山梨 1995: 1-18）。

（2） a. The glass is half-empty. もう半分もない

b. The glass is half full. まだ半分もある

ただし、こういった分析において各々の主体がなぜ異なる捉え方をしたかという動機の問題は不問にされる。これに対して、本稿は、生態心理学の知覚・行為観に立ち、見えの背後にあるのは事態をただ漫然と眺めるだけの受動的な観察者でなく、何らかの意図や欲求を持った動的な行為者であると考え、ことばの背後にある主体の“在り方＝構え（stance）”に注目する。

2.2. 長さの保存問題――「本当の長さ」を求めて

ピアジェは子どもに次のような二つの図形を見せ、どちらが長いかと聞いた。すると、年長の子どもは二つの図形の長さは異なると正しく答えることができたのに対して、年少の子どもは等しいという間違った答えを出すという結果が出た。

このような考察に対し、上野はこれら二つの物体を棒として用いるという前提があるならば、実世界でこれらは同じ長さとみなされると述べている。

（3）　事物の長さはアクションと相対化される（上野・宮崎 1985: 67）

例. 棒として用いる

紐として用いる

つまり、二つの物体がどんなものであり（材質）、何に用いられるか（用途）によって長さの判断が変わるというのである。これは本当の長さというものが主体の携わるアクションと無関係にあり得ないという主張であり、ことばの意味を主体と独立に規定する真理条件意味論に対する重要な反駁となっている。認知言語学では、このような属性の性質は“相互作用的属性”と呼ばれ、次のように指摘されている（Lakoff 1987: 59）。

（4）　相互作用的属性（interactional properties）

属性の妥当な概念は、いかなる生き物とも無関係に客観的に世界に存在する、といった類いのものではない。むしろ、（中略）物理的、文化的環境の一部分としてのわれわれの相互作用の結果である。

2.3. 相互作用的属性

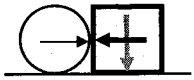
科学的な言明のなかで、色彩や質量といった事物の物理的な属性は対象の持つ内在的な性質として分析される。例えば、「なまりは重い」のような科学的言明の場合、客観的な質量または重量という概念は意味をなす。しかし、日常言語で用いられる重さの概念はどうであろうか。例えば、「カバンが重い」という場合、それはカバンその物の質量を述べているというより、カバンを運ぶ等の行為に対する“抵抗力”として理解されているのではないだろうか[2)]。

このように「重い」という概念は、対象に備わる内在的な属性を表わすのではなく、「動かす」といった動作に代表される主体の活動を背景に理解される相互作用的属性といえる。「重い」の意味もそのような身体的な経験を考慮して記述される必要があるだろう。新地は認知意味論の観点から「重い」の用法を総合的に観察・記述し、その意味を次のように定義・図式化している。

（5）「重い」の表わす典型的意味（新地 1997: 80）

a. 重量による上から下への力がかかっている

b. ものを動かすときに動かしにくい



ここで注意すべきは○で表示された主体は、単なる抵抗力を感じる経験者ではなく、□で表示された対象に対して働きかける行為者であるという点である。このような行為者の観点は認知意味論のなかでまだ積極的に考慮されていない。しかし、攻撃や抵抗のような概念を論じる場合、主体を単なる観察者とみなすことは不十分であり何らかの目標を持った行為者を想定する必要がある。

3. 生態心理学の知覚・行為観

3.1. 生態学的言語観

生態心理学は、知覚者を単なる刺激に対する受動的な存在とみなすのではなく、環境に対して積極的に関与し状況の意味を主体的に理解し、今後予想される事態から自己の行為を調節するというエージェントとみなす。また、それに応じて環境のほうも無秩序な世界でなく、生物の身体的な性質や能力と相対的に有意味に構造化されていると考える（Gibson 1979、Reed 1996、佐々木 1994、岡田 1995、三嶋 2000）。

以下は、生態心理学が提唱する人間・環境観である。

（6） 生態心理学の人間・環境観

A. 人間観—能動的に環境のなかで活動するエージェント

B. 環境観—生物と相対的に有意味に構造化された環境

このような生態心理学の実在論に立つならば、言語の表わす概念も単なる観念的な構成物でなく、環境や経験の構造によって支えられたものとして分析される。言い換えると、言語の概念は恣意的な分節に基づくものでなく生態学的な環境に動機づけられたものということになる。以下は、生態心理学が想定する代表的な言語観である（Reed 1996: 324）。

（7） 生態学的言語観（ecological view of language）

言語とは、観念あるいは表象の伝達手段ではない。それは情報を他者に利用可能にするための手段であり、それによって自身およびその集団の

活動調整に寄与するものである。そのため、言語が何かを指し示すとき、それが指し示しているのは内的表象ではなく環境の状況や状態である

3.2. 生態学的実在論

生物と環境は互いに切り離せない。環境なき生物が存在できないように、環境もまた生物なしにありえない。生態心理学は、環境を抽象化された物理的な世界と異なるものとして、そこに生きる生物にとって豊富な意味や価値に満ちていると考える。このような環境が備える生物にとっての意味や価値を“アフォーダンス（affordance）”という（Gibson 1979）。

例えば、穴は単なる空間的なへこみであるだけでなく、壁に空いた穴はのぞくことを、地面に掘られた穴は相対的な大きさに応じ、そこに落ちることやそこで躓づくことをアフォードする。さらに、動物にとって適度な大きさの穴はそこに住まうこと、隠れることをアフォードする。このように環境は行為の可能性に満ちている[3)]。

アフォーダンスは大きく生物の行為の可能性に関わる行為のアフォーダンスと生物の知覚に関わる事象のアフォーダンスに分類される。本稿で問題にするのは基本的に行為のアフォーダンスであり、一般に、行為者の活動を促進または阻害する環境の属性として定義される。その際、状況または状況のなかの要素は、容易や困難または不可能な状況として意味づけられる。具体的には、障害、抵抗、地形、重荷、強敵などが問題にされる。

（8）　行為のアフォーダンス―活動を促進・阻害する環境の属性

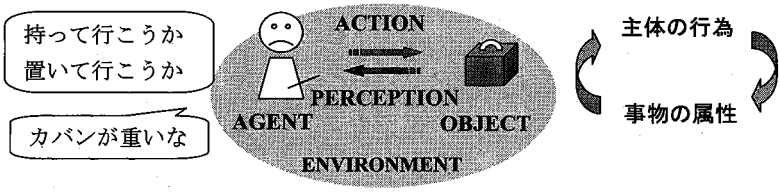
- 行為者にとっての意味　：　行為の実行可能性
- 状況のタイプ→　容易、困難（行為）
- 利用される環境　：　障害、抵抗、地形、重荷、強敵

本稿で具体的に分析の対象となる「重い」や「かたい」のような属性はここでいう“抵抗”にあたる概念であり、基本的に行為のアフォーダンスに言及する概念として分析される。

3. 3. 知覚と行為のカップリング

アフォーダンスは環境における生物の具体的なアクションのなかで立ち現れる。主体である生物はアクションが円滑に進むかどうかによって環境のアフォーダンスを知覚し、そうやって知覚されたアフォーダンスに基づき遂行中の活動を調整しまた未来の行為に備える。このように知覚と行為が互いの活動の源泉となって循環することを“知覚の循環”または“知覚と行為のカップリング”という（Neisser 1976, Valera *et al.* 2001）。

（9） 知覚の循環 perceptual cycle



例えば、「カバンが重い」という表現は、われわれがカバンを運ぶという活動に関わるときに初めて知覚される属性であり、そのような行為に関与しない場合は荷物の重さという性質は事物の属性として実在してもそこに注意が向けられることはない。また、「カバンが重い」ということはカバンを運ぶという運搬を困難にする負のアフォーダンスとして理解される。

このように知覚された属性（「重い」）をもとに、主体は現在の行為を実行するかどうかを決定する。基本的に容易な状況の場合はそのまま行為を実行し、困難な状況の場合は、それに対処しつつ新たなアフォーダンスの探索を始める。例えば、もっと軽いカバンを探す、または、カバンから不必要なものを出すなどの対処が考えられるだろう。

4. フレーム意味論の射程

生成文法に基づく語彙意味論は、動詞に代表される行為や出来事の意味についてはその項構造や事象構造などの提案によりかなり具体的な分析を行っている（Pinker 1989、Jackendoff 1990、Pustejovsky 1995、影山 1996、小野 2005 等）。これ

に対して、属性や状態を表わす形容詞の意味論については記述的な分類に止まる研究が多く（西尾 1972、安井他 1976、Dixon 1977、寺村 1982、荒 1989 等）、本格的な意味構造の分析に踏み込んだものはまだ少ない。

最近の形容詞に関する包括的な研究として、Uehara（1998）、八亀（2001）、澤田（2004）などの優れた成果があるが、基本的にこれらの研究は形容詞を属性とみなし、その背後にある相互作用に目を向けるものではない[4]。また、形容詞の意味構造を提案するものとして、Paradis（2001）や Kenenedy（2001）が段階性構造（scalar structure）を立てているが、段階性構造は対義語関係を表わすものでありフレーム意味論の射程にあることに注意したい。

形容詞の意味研究が進展しない原因の一端は、属性という概念がそれ以上要素に分解することが困難な概念であり、従来の要素還元論に基づく意味の理論がうまく機能しないという点にある。このような反省に立ち、本稿はことばの意味を要素に分解し、それらの合成として表わす従来の意味論でなく、意味は何らかの全体構造の理解として立ち現れるとするフレーム意味論の立場から属性の意味論の可能性を探る。

4. 1. フレーム意味論（Fillmore 1982, Fillmore 1985）

ことばは文脈から切り離された状態で独立に理解されるのではなく、つねに何らかの場面のなかで理解される。フレーム意味論はそのような場面を“フレーム（frame）”という構造化された知識の枠組みとして表現し、ことばの意味を個々の表現が理解される全体的な場面に位置づける。その際、意味は喚起されたフレームのなかの要素や関係の焦点化の問題とみなされる。

以下は、フレーム意味論の意味観を纏めたものである。

第一に、フレーム意味論は従来の要素還元論から「意味の全体論」に基づくことは言うまでもない。第二に、従来のような真偽値に基づく真偽の意味論でなく、ひといかに世界を概念化するかという「理解の意味論」を目指す。第三に、合成性の原理の代わりに個々の表現が喚起するフレーム間の「適合性の原理」を立てフレームの相互関連性を重視する。

(10) フレーム意味論の意味観

A. 意味の全体論—意味は場面や文脈に依存する

B. 理解の意味論—意味は理解＝概念化の問題である

C. 適合性の原理—意味は場面の構成に還元される

以下、具体的な事例からフレーム意味論の意味分析を概観してみよう。

● 商取引フレーム（Commercial transaction frame）

「売る」や「買う」といった動詞は従来の意味論によると相互に無関係な語として分析される。しかし、具体的な活動の場面を考慮すると、これらの概念は商取引という共通の場面で理解されることに気づく。フィルモアは商取引を構成する参与者として《売り手》や《買い手》、《金銭》や《商品》などを立て、金銭と商品の所有権が売り手－買い手間で交換されるという出来事の連鎖によって商取引の活動が構造化されると述べている（Fillmore 1977）。

このように動詞の意味は要素に分解されるのではなく、商取引という場面のなかのどの要素や関係を焦点化するかという問題に還元される。これによって「太郎君は木村屋でパンを買った」のような発話は、太郎君＝《買い手》、木村屋＝《売り手》、パン＝《商品》と理解できる。本稿は、このように場面を成立させる経験の構造として活動の文脈を想定し形容詞の理解に適用する。

(11) 商取引フレーム

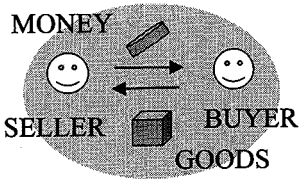
a. SELLER sells GOODS to BUYER

b. BUYER buys GOODS (from SELLER)

c. BUYER pays MONEY for GOODS

d. GOODS costs BUYER MONEY

e. GOODS are cheap/expensive



FRAME ELEMENTS

4.2. 経験の構造——アクション・フレーム

環境は生物の身体と相対的に意味づけられる。ただし、事物や他者は動物がただそこに存在するだけではその意味は定まらない。それらに具体的な意味や価値を与えるのは人間を含めた動物の活動である。発達心理学の知見に鑑みても、事

物はそれだけで知覚されるのではなく、つねに活動の場面のなかに位置づけられて理解される（Werner & Kaplan 1974, Siegel & Cocking 1977）。

つまり、人間の経験は最初から言語にあるように分節化された状態にあるのではなく、〈主体－活動－対象〉が互いに有機的に結び合わされた未分化な状態を基礎とする。例えば、ボールという事物はそれを投げるという原初的な活動のなかで知覚されるように、ボールのみで文脈から切り離された状態で理解されるのではない（尼ヶ崎 1991、小林 1997）。

本稿は、ひとつの理想認知モデル（ICM）として、周囲の環境を構造化する活動をアクション・フレーム（action frame）として一般化する[5]。アクション・フレームは、日常的な場面のうちで主体の能動的な行為（他動性の高い活動）を理想化したモデルであり、日本語では行為・移動・授受といった概念が代表的なものとして記号化される（寺村 1982）。

（12）　活動フレーム action frame

—経験に構造を与える理想化された活動のモデル

例. 言語的に重要な活動の具体例

A. 行為（action）のフレーム　：　操作、破壊、制作、…

B. 移動（motion）のフレーム　：　移動、出現、消滅、…

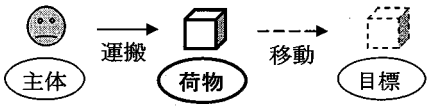
C. 授受（transaction）のフレーム　：　授受、売買、伝達、…

例えば、ものを移動させる活動として「運ぶ」「動かす」「持ち上げる」などの表現があるが、これらはどれも「誰かが何かをどこかへ移動させる」という運搬の場面として理想化される。運搬の場面を構成するのは、運搬の《主体》、運搬される《荷物》、移動の《場所》などの参与者であり、活動の目標として最終的にある場所にものが存在するようにするという意図がある。

（13）　運搬フレーム Carrying frame

A. 参与者構造：主体、荷物、（道具）、…

B. 移動の経路：起点、経路、着点、….



運搬のような基本的な行為の場合、参与者は動詞の表層格に対応を持つ場合が多い。この場合、《主体》としての人間はガ格で、《荷物》としての事物はヲ格で、《目標》としての場所はニ格で標示される。

(14) a. 太郎は教室へ椅子を運んだ

b. 太郎：ガ格：《主体》
椅子：ヲ格：《荷物》
教室：ニ格：《目標》

また、この文のあとに次のような文が続いた場合、前者の場合「それ」＝椅子、後者の場合「それ」＝教室と理解できる。このような照応の現象は属性がとる対象の意味役割を単純に「主題（theme）」とする従来の方法論では分析が困難であろう。次節は、こういった属性の意味が活動の文脈のなかでいかに理解されるかについて考える。

(15) a. それはとても重かった　：　それ＝椅子

b. それはとても遠かった　：　それ＝教室

4.3. 形容詞の解釈と活動の文脈

フレーム意味論に基づき活動の意味論を想定すると、従来の要素論に基づく語彙意味論がこれまであまり議論してこなかった名詞や形容詞の意味も適切に処理できる。ここでは、「椅子」のような名詞が表わす事物がアクションと相対化されることでいかに多様に理解されるかその解釈の可能性を探り、その上で形容詞を用いた「椅子が重い」のような文が表わす意味を考える。

4.3.1. 「椅子」の意味論

さて、‘椅子’とは一体なんだろう。まず、椅子はある形状や材質などの特徴を持つが、その最も重要な性質は「ひとがそこに座るための道具」という機能に基づく定義であろう。しかし、実際は事物の機能や役割はそれが現れる活動の文脈と相対的に変わる。例えば、椅子は椅子としてそこに座るだけでなく、踏台としてそこに乗る、荷物としてそれを運ぶといったさまざまな場面に現れるが、それぞれの場面で問題にされる椅子の性質＝機能は次のように異なる。

(16) アクションと相対化された椅子の意味

a. 椅子に座る　：　椅子⇒椅子ロール

b. 椅子に乗る　：　椅子⇒踏台ロール

c. 椅子を運ぶ　：　椅子⇒荷物ロール

参考）？　椅子を食べる：　椅子⇒食物ロール

このように椅子はつねに椅子として機能するのでなく、活動の文脈がその場の椅子の価値を決める。このときに利用されるのが椅子という事物のアフォーダンスであり、椅子を食べるといった行為は椅子のアフォーダンスになくそのような表現も不自然になる。ただし、生木を食べて生きる白蟻のような生物ならばこのような表現も全く自然に響くことであろう[6]。

4.3.2.「重い」の意味論

形容詞の最も重要な機能は対象となる事物や人物の評価であろう（樋口 1989、Ford *et al.* 1998, Hunston & Sinclair 2000）。その際、事物や人物のどの側面が焦点化されるかが重要な観点になる。例えば、椅子に乗る場合は椅子の高さが問題になるが、椅子を運ぶ場合は椅子の高さよりも重さのほうが重要であろう。このように事物の属性＝評価は主体が関わるアクションと相対化される。

以下は、そのようなアクションと相対化された椅子の属性である。

(17)　アクションと相対化された椅子の属性

a. 椅子に座る　⇒　椅子がかたい

b. 椅子に乗る　⇒　椅子が低い

c. 椅子を運ぶ　⇒　椅子が重い

参考）？　椅子を食べる⇒？椅子がおいしい

「重い」という属性が知覚されるのは荷物を運ぶなどの運搬という活動のなかであり、「重い」はそのなかで《荷物》の重量を表わすものとして一般化される[7]。また、その際「重い」は運搬や負担といった活動を阻害する抵抗力として概念化される。属性という概念はこのような活動の文脈に位置づけられたとき、行為のアフォーダンスとして解釈される傾向がある。

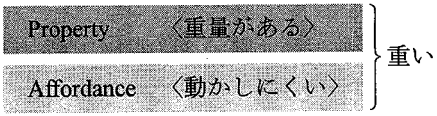
本稿は、このような解釈を便宜的に以下のように表現することにする。これは、

「重い」という属性が典型的に運搬という活動の文脈のなかで、《荷物》の属性として理解されることを表わすものである。

(18) 「重い」の典型的アフォーダンス

a. 重量（対象）⇒困難（主体、運搬、荷物）

b. 運搬フレーム：運ぶ、動かす、持ち上げる etc.



5. 具体的な分析――「かたい」を中心に

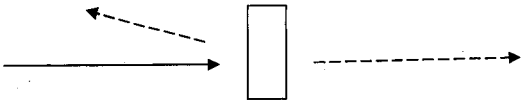
活動の障害として解釈される形容詞として多様な形容詞があるが（仲本 2000）、本稿では、抵抗を表わす代表的な概念として「かたい」に注目し、「かたい」という属性が知覚される活動の文脈を特定化する。次に、物理的な文脈だけでなく比喩や物語の理解においても活動の文脈が必要となることを示し、ことばの理解において知覚と行為の相関が保持されることの重要性を指摘する。

5. 1. 「かたい」の意味論

5. 1. 1. 物理的用法 natural affordance

抵抗力という概念は、事物の内在的な性質でなく、何らかの主体の行為に対する対象の反作用であり相互作用的属性として規定される。認知意味論のイメージ図式の分析を適用すると、「かたい」という概念は次のような妨害の図式のなかで、□で表わされた障害物の持つ抵抗力の大きさとして表わされることになるだろう（Johnson 1987: 128）。

(19) 妨害の図式 blockage schema



ここで重要なことは「重い」の場合もそうだったように、最初に矢印で表わされる力の行使があり、そのような力に対する反作用として□で示された対象が「障害物」として立ち現れるという点である。例えば、次のような発話の背景には活動の文脈として「パンを切る、食べる」という行為や、「ネジを回す、開ける」といった行為がある。

(20)　a.　{パン、肉、…}がかたい→なかなか切れない

　　b.　{ネジ、窓、…}がかたい→なかなか回らない

このように「かたい」という概念の背後にはつねに活動の文脈がある。われわれは発話の解釈にあたりそういった活動の文脈を考慮する必要があるだろう。このような活動の文脈は実際の文理解や文章理解において暗黙のうちに挿入されるため、われわれはそういった文脈をあえて意識することは少ない。しかし、適切な活動の文脈が喚起されない場合は理解に支障をきたす。

本稿は、属性の意味を十分に記述するためには、このような暗黙知となった活動の文脈を明示化することが必須であると考え、イメージ図式にあった力の実質的な内容をアクションとして表現する。

5.1.2.「かたい」に関する経験の記述

われわれは環境のなかのあらゆる事物についてそのかたさを問題にするわけではない。例えば、「ポストがかたい」という表現からは自然な文脈が感じられない。これは確かに真なる正しい文であるが、われわれの生活のなかで有意味な理解を得られない。これはポストを破壊するという行為が文化のなかで有意味な行為の連関性をもたないからであろう。

ここから「かたい」という表現が、対象の破壊や変形といった活動の文脈で理解されることが示唆される。西尾は日常生活のなかで事物を「かたい」と感じる経験を次のように述べている（西尾 1972: 414）。

(21)　「かたい」が関わる日常的経験

　　われわれの日常的体験として「かたさ」が感じられるのはどんな方法によっているだろうか。外から加えられる力としては「押す」「たたく」「引張る」等々の種類が考えられ、物体の変形のしかたとしては「へこむ」

「折れる」「曲がる」「伸びる」等々の種類が考えられる

このような経験を生態心理学の観点から見ると次のように大きく実質的な変化を引き起こす“探索活動”と最終的な目標を含んだ“遂行活動”に分類される。フレーム意味論によると、これら二つの活動は全体的な活動のなかで手段と目標というかたちで互いに関連性のあるプロセスとして描かれ、文章理解において一貫性のある説明を与えることができる。

(22) 「かたい」が関わる二つのアクション

a. 探索活動—表面接触活動 surface contact activities
押す、たたく、ひっぱるなどの打撃活動

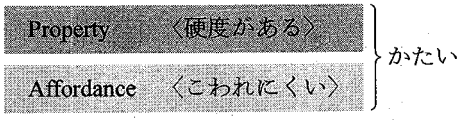
b. 遂行活動—状態変化活動 change of state activities
切る、折る、曲げるなどの変形活動

また、「かたい」の表わす意味は「物体の質が丈夫であって、力を加えても形が変わりにくい（西尾 1972: 413)」、または、「〈何らかの力に対して〉〈抵抗力を感じさせる〉〈さま〉（籾山 1994: 65)」とされる。このような意味構造に「かたい」という概念が理解される活動の文脈を反映させると、「かたい」の意味は“操作可能性（manipulability)”のひとつとして一般化される。

(23) 「かたい」の典型的アフォーダンス

a. 硬度（対象）⇒困難（主体、破壊、対象）

b. 破壊フレーム：切る、割る、曲げる、伸ばす



また、「かたい」と同様に変形に対する抵抗を表わす概念として、「太い（→折れない)」や「厚い（→割れない)」がある。例えば、「神経が太い」や「面の皮が厚い」のような比喩の場合がそれにあたる。これらは基本的に形状や大きさを表わすが、太いものほど折れにくく、厚いものほど割れにくいという環境のアフォーダンスに支えられている。

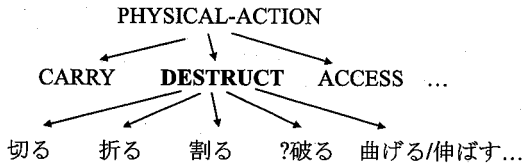
これに対して、「かたい」のような属性は対象の形状や行為の様態を捨象し、最

終的な結果または目標である破壊や変形のみに焦点をあて、そのような行為に対する抵抗力を表わす抽象度の高い概念となっている。これは、われわれのアクションが最終的に行為の様態でなく、行為の目標（志向性）によって分類されていることの証左となるだろう。

(24)　a.　この薪は　かたい（→太い）　→　なかなか折れない
　　b.　この餅は　かたい（→厚い）　→　なかなか割れない
　　c.　この肉は　かたい　　→　なかなか切れない

破壊に関する動詞は、次のようなアクションの階層性を持つ。「かたい」という概念は、物体の形状に基づく行為の様態を捨象した破壊という活動に対する抵抗力を表わすといえる。このように形容詞の意味をあるアクションと相対化することで意味を記述できる形容詞は多い。「かたい」「重い」以外にも、接近という活動と相対化される「遠い・近い」や、攻撃－防御という活動と相対化される「強い・弱い」といった形容詞がある。

(25)　アクションの階層性



5.2.　比喩の理解と物語の理解

5.2.1.　心理・社会的用法 mental & social affordance

属性の理解に必要な活動の文脈は物理的な用法だけでなく、比喩の理解においてもそのまま延長されることが多い（不変性の仮説、Lakoff（1987））。以下、「かたい」の比喩的用法を簡単に観察し、それらの生成や理解において単なる対象間の類似性に基づく「見えの共有」でなく、その背後に対象に対する共有された活動＝「構えの共有」があることを主張する。

抵抗力を表わす形容詞は抽象的な意味領域に拡張されるとき、抵抗力という意味を保持する場合が多い。人間の姿勢や態度を表わす場合も、心理・社会的な意

味で相手を変形するという活動があり、相手からの抵抗を受けるという図式が共有される。例えば、「表情がかたい」や「意志がかたい」のような場合、その背後に「表情をくずす」「意志を曲げる」といった活動の文脈がある。

(26) a. 彼女の｛表情、姿勢、見方、…｝はかたい

b. 先生の｛意志、決意、信念、…｝はかたい

(27) a. 口がかたい→なかなか秘密を漏らさない

b. 頭がかたい→なかなか考え方を変えない

このような現象は、見えを可能にするのは主体の構えであるという生態心理学の主張に繋がり、こういった主張を受け入れるならば比喩を支える経験の構造も次のように二つの側面から記述される。

(28) 精神はもろい物体である（Lakoff & Johnson 1980: 71）

A. 見えの共有―ある対象をもろい物体と見なす

B. 構えの共有―対象に対する破壊の構えを持つ

次のような比喩も従来ならば、「関係は結び目である（鍋島 2005: 110）」や「考えは食べ物である（Lakoff & Johnson 1980: 71）」といった見えの構造に基づき記述されるであろう。しかし、そういった見えを成立させるのは、外からの攻撃から家族の結束を守ろうとする主体の構えであり、また、かたい＝難しい作品を何とか咀嚼＝理解しようとする主体の構えではないだろうか。

(29) 家族の｛結束、団結、絆、…｝はかたい

a. 見えの共有―関係を《結び目》とみなす

b. 構えの共有―結束（結ぶ）、維持、解帯（解く）

(30) 先生の｛作品、文章、話、…｝はかたい

a. 見えの共有―考えを《食べ物》とみなす

b. 構えの共有―把握、摂取、咀嚼、消化、吸収（鍋島 2004: 110）

5.2.2. 物語の理解と活動の文脈

最後に、活動の文脈や知覚される属性の表現が一貫性を持って用いられる場合として、こどもの物語を取り上げてみたい。現在の言語学はことばを文という単位で分析する傾向があるが、実際の言語理解はより大きな談話のなかで進められ

る。実世界では活動の文脈は直接に知覚されるように、物語の場合、登場人物の活動の文脈は明示的に物語られることによって共有される。

以下の文章は有名な絵本の抜粋である。この物語のなかで主人公たちはたまごを割ることを目標にし、そのような活動への意図を背景にたまごをげんこつでたたく、しかし、意図されたとおりにたまごは割れない。二人はその原因を対象の属性＝「かたい」に帰属する。しかし、この時点で目標は達成されていないため、たまごをいしでたたくという手段がとられ対象は見事に割れる。

(31)　ぐりとぐら、まず、えぷろんをしめました
「さあ、たまごをわるぞ！」
ぐりはげんこつで、たまごをたたきました
「おお、いたい！　なんてかたいんだろう」
ぐりはなみだをながしてとびあがりました
「いしでたたいてごらんよ」とぐらがいいました
いしでたたくと、やっとわれました
（『ぐりとぐら』（中川李枝子、大村百合子（著）福音館書店）

その後、物語の主人公は最終的なゴールにたどりつくか、または、あきらめるかするまで目標に向って活動を続ける。この物語では「たまごをわる」のは「たまごをたべる」ためであり、このような手段と目的の連関によって活動は構造化される。また、物語の構造化はこういった活動の一貫性だけでなく、行為と知覚の間の一貫性によっても保証されている。

したがって、一貫性が破れたとき物語の理解は困難になる。例えば、(32) は「たたく－割る」という行為が喚起する破壊と「重い」という属性が喚起する運搬という活動が適合しておらず、反対に (33) は「運ぶ－抱える」という行為が喚起する運搬と「かたい」という属性が喚起する破壊という活動が適合せず、一貫性がない理解が困難な文章となっている。

(32)　「さあ、たまごをわるぞ！」
ぐりはげんこつで、たまごをたたきました。
「おお、つらい！　なんて重いんだろう」

(33)　「さあ、たまごを運ぶぞ！」

ぐりはりょうてで、たまごをかかえました。

「おお、いたい！　なんてかたいんだろう」

このように物語は個々の表現が喚起するフレーム情報の重層的な織合せによって結束性が構築される。フレーム意味論の観点からいうとこういった結束性はフレーム間の適合性の問題にあたる。本稿で提案したアクション・フレームはこういった物語の理解における分析の単位として、今後語彙意味論がテクスト言語学に応用されるときに重要な意味の纏まりを提供するであろう。

6. おわりに――まとめと展望

本稿は、形容詞に代表される属性の意味論を行為や出来事などの活動の文脈に位置づけることで適切に記述する方法を提案した。具体的には、抵抗力を表わす「かたい」という形容詞の用法に注目し、行為に対する障害を表わす形容詞が活動の文脈を背景に一貫性をもって記述できることを示した。今後は、物理的な属性だけでなく生物や人間の相互作用のなかで立ち現れる属性を扱ってみたい。生物的な現象は主体と対象の双方が自律的に振舞うために複雑な活動の文脈を必要とするが、素朴生物学や心の理論などの近年の心理学の成果を取り入れることで実りのある成果が期待される（子安 2000）。

註

1) 意味＝概念でないことに注意。これは言語を静的な対象してでなく、実践的な活動とみなす立場である（時枝 1950、三浦 1956）。こういった認知意味論の主張を生態心理学の観点から基礎付けた研究として本多（2005）がある。
2) さらに、「ドアが重い」になるとドアの重量よりも行為者にとってドアを動かしにくいという性質のみが前景化する。こういった場合を考慮すると、重量という概念は行為の結果として帰属されたものであると気づかされる。
3) このような観点から「穴」を定義したものとして『あなはほるもの おっこちるところ』（クラウス＆センダック、岩波書店）という絵本がある。標題にあるようにこの本が見つめる対象はこどもが具体的な活動のなかで知覚する穴のアフォーダンスである。
4) ただし、八亀（2001）による形容詞文のテンス分析は本稿の見解と一致する。八亀

は、形容詞の解釈に属性と認識の二つの階層があることを指摘し、その背後に評価者（＝本稿でいう行為者）の存在を仮定している。

5）同様な観点から、詳細かつ大胆にフレーム意味論を日本語の辞書構築プロジェクトとして立ち上げた研究として黒田・中本・野澤（2005）がある。本稿の形容詞の分析はそのようなプロジェクトのひとつと見てもいいだろう。

6）例えば、「あの犬はうまそうだ」という文は犬を食べるという活動が有意味な文化のなかで意味を持つ。このように対象に対する活動の可能性は共同体の文化的制約を受ける（アフォーダンスの文化相対性）。

7）このような対象の持つ側面は側面語や部分語として分析される（澤田 2004）。本稿で取り上げる活動の文脈も「この鞄は〈重量〉が重い」のように側面語によって明示化できるが、本稿はその方向はとらない。

参考文献

尼ヶ崎彬（1990）『ことばと身体』剄草書房.

荒正子（1989）「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学 3』、むぎ書房、147-162.

Beaugrande, R. & Dressler, W.U.（1981）*Introduction to Text Linguistics*. London: Longman.（池上嘉彦（他訳）（1984）『テクスト言語学入門』紀伊国屋書店.

Croft, W.(1986) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago: University of Chicago Press.

Cruse, A.D.(1986) *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dixon, R.M.W.（1977）"Where have all the adjectives gone?" *Studies in Language*, No.1, 19-80.

Fillmore, C.J.(1977) "Topics in lexical semantics," In W.C. Roger (ed.) *Current Issues in Linguistic Theory*, 76-138, Indianapolis: Indiana University Press. [C.J. Fillmore. *Form and Meaning in Language Vol.1*, Stanford: CSLI Publications, 201-260. に再録 .]

Fillmore, C.J.(1982) "Frame semantics," In Linguistics Society of Korea (Ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, Seoul: Hanshin, 111-137.

Fillmore, C.J.(1985) "Frames and the semantics of understanding," *Quaderni di Semantica*, **6**(2), 222-254.

Ford, C.E, Fox, B.A. & Thompson S.A.(2003) "Social interaction and grammar," In M. Tomasello (ed.) *The New Psychology of Language Vol.2*, Hillsdale: LEA Publishers, 243-270.

Fujii, Y.(1999) "The story of "break"", In Hiraga *et al.* (Eds.) *Cultural, Psychological and Typological Issues in Cognitive Linguistics*, Amsterdam: John Benjamins, 313-332.

Gibson, J.J.(1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton.（古崎敬（他

訳）（1985）『生態学的心理学』サイエンス社.）
樋口文彦（1989）「評価的な文」『ことばの科学 3』、むぎ書房、147-162.
本多啓（2005）『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.
Hunston, S. & Sinclair, J.(2000)"A local grammar of evaluation," In S. Hunston & G. Thompson (eds.) *Evaluation in Text*, 1-27, Oxford: Oxford University Press.
Jackendoff, R.(1990)*Semantic Structures*. Cambridge: MIT Press.
Johnson, M.(1987)*The Body in the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.（菅野盾樹（他訳）（1991）『心のなかの身体』紀伊国屋書店.）
影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版
河上誓作（編）（1996）『認知言語学の基礎』研究社
Kennedy, C.(2001)"Polar opposition and the ontology of 'degrees'," *Linguistics and Philosophy*, **24**, 33-70.
黒田航・中本敬子・野澤元（2005）「意味フレームに基づく概念分析の理論と実践」山梨正明（他編）『認知言語学論考 No. 4』ひつじ書房、133-269
国広哲弥（1970）「語彙の対照研究」国広哲弥（著）『意味の諸相』、105-148、三省堂
小林春美（1994）「語彙の獲得」小林春美・佐々木正人（編）『子どもたちの言語獲得』大修館書店、85-109
子安増生（2000）『心の理論』岩波書店
Lakoff, G.(1987)*Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.（池上嘉彦・河上誓作（他訳）（1993）『認知意味論』紀伊国屋書店.）
Lakoff, G. & Johnson, M.(1999)*Philosophy in the Flesh*. New York: Basic Books.(計見一雄(訳)(2004)『肉中の哲学』哲学書房.）
Langacker, R.W.(1987)*Foundations of Cognitive Grammar Vol.1*. Stanford: Stanford University Press.
Langacker, R.W.(1991)*Foundations of Cognitive Grammar Vol.2*. Stanford: Stanford University Press.
松本曜（1991）「日本語類別詞の意味構造と体系」『言語研究』**99**、82-106
三嶋博之（2000）『エコロジカル・マインド』日本放送協会
三浦つとむ（1953）『日本語はどういう言語か』季節社
籾山洋介（1994）「形容詞「かたい」の多義構造」『名古屋大学日本語日本文化論集』**2**、65-90、名古屋大学留学生センター
鍋島弘治朗（2004）「理解のメタファー」『言語文化学』**13**、99-116, 大阪大学言語文化学会
鍋島弘治朗（2005）「認知メタファー理論における知覚レベルと概念レベル」*Conference Handbook* **6**, 106-108, 日本認知言語学会

仲本康一郎（2000）「アフォーダンスに基づく発話解釈」『語用論研究』**2**、50-64.

仲本康一郎（2005）「属性の意味論と活動の文脈」『ことば工学研究会資料』**19**、55-64, 人工知能学会

Neisser, U.(1976)*Cognition and Reality.* San Francisco: Freeman & Company.（古崎敬（他訳）1978 認知の構図，サイエンス社.）

西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

小野尚之（2005）『生成語彙意味論』くろしお出版

大堀壽夫（2002）『認知言語学』東京大学出版会

岡田美智男（1995）『ロごもるコンピュータ』共立出版

Parradis, C.（2001）"Adjectives and boundedness", *Cognitive Linguistics*, **12**(1), 47-65

Pinker, S.(1989)*Learnability and Cognition.* Cambridge: The MIT Press.

Pustejovsky, J.(1995)*The Generative Lexicon.* Cambridge: The MIT Press.

Reed, E.S.(1996)*Encountering the World.* Oxford: Oxford University Press.（細田直哉（訳）（2000）『アフォーダンスの心理学』新曜社.）

佐々木正人（1994）『アフォーダンス』岩波書店

澤田浩子（2003）『認知カテゴリと属性叙述に関する日中対照研究』神戸大学博士論文

Siegel, I.E. & Cocking, R.R.(1977)*Cognitive Development.* New York: Holt, Reinhart and Winston.（子安増生（訳）（1983）『認知の発達』サイエンス社.）

新地綾（1997）「形容詞〈重い〉の多義性に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』3、77-104, 京都大学.

Talmy, L.(2000a)*Toward Cognitive Semantics Vol.1.* Cambridge: The MIT Press.

Talmy, L.(2000b)*Toward Cognitive Semantics Vol.2.* Cambridge: The MIT Press.

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

時枝誠記（1950）『日本文法口語篇』岩波書店

Tomasello, M.(1999)*The Cultural Origin of Human Cognition.* Cambridge: Harvard University Press.

Turvey, M. T.(1996)"Dynamic touch", *American Psychologist*, **51**(11), 1134-1152.（三嶋博之（訳）「ダイナミック・タッチ」（2001）『アフォーダンスの構想』東京大学出版会、173-211.）

Uehara, S.(1998)*Syntactic Categories in Japanese.* Kuroshio Publishers.

上野直樹・宮崎清孝（1985）『視点』東京大学出版会

Valera, F.J, Thomson, E. & Rosch, E.(2001)*The Embodied Mind.* Cambridge: MIT Press.[田中靖夫（訳）（2001）『身体化された心』工作社.]

Werner, H. & Kaplan, B.(1974)*Symbol Formation.* New York: John Wiley & Sons.[柿崎祐一（監

訳）（1974）『シンボルの形成』ミネルヴァ書房.］
八亀裕美（2001）「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究』別冊 1，大阪大学大学院文学研究科
山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房
山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお出版
安井稔・秋山怜・中村捷（1976）『形容詞』研究社

〈キーワード〉認知言語学，相互作用的属性，アフォーダンス，活動の文脈，フレーム意味論

Properties, Actions and Meaning

—A Frame-semantic Approach—

Koichiro NAKAMOTO

Previous studies have generally conceived adjectives to denote a "property" or "state" of an entity. However, this conception does not take the interpretation of adjectives such as *heavy/light* and *hard/fragile* into sufficient consideration; the meanings of these words are best characterized in terms of some activity involving the relevant entity. Lakoff (1987) uses the term "interactional property" in this regard. Our analysis assumes that an interactional property is equivalent to an "affordance," i.e. the opportunity to carry out a certain activity. For instance, the sentence "The bag is heavy" does not merely describe the objective state of the bag but also implies the resistance against carrying the bag. In this paper, we provide a descriptive devise, i.e. an action frame to represent the meaning of interactional properties.